

主 題：六つの封印を解く2

聖書箇所：ヨハネの黙示録 6章9-11節

今日は、黙示録6章9節から11節までのところをごいっしょに学んでいきます。小羊イエス・キリストによって、だれも解くことのできなかった封印が解かれ始めました。第一の封印が解かれたときに、白い馬とそれに乗るものが出て来ました。それはこの地上に起こることを象徴していました。最初に起こることは、偽キリストによってもたらされる一時的な偽りの平和でした。偽キリストはそのことを約束し、地上に一時的な平和をもたらします。第二の封印が解かれたときに、今度は赤い馬が出て来ます。この馬とそれに乗るものは、この一時的な平和を奪って、人々や国々の間に様々な争いを起こすと記されていました。第三の封印が解かれます。今度は黒い馬が出て来ます。地上に、この世界に飢饉が起こると言います。そして、第四の封印が解かれるときに、青ざめた馬が出て来て、地球上の四分の一の人たちが殺されるということです。

確かに、これらを見たときに、人類の歴史を振り返って、偽キリストはたくさん現れたし、様々な民族間の争いも起こって来ました。飢饉もあったし、たくさんの人たちがいのちを落とすような争いもありました。確かに、これまでも同じようなことがあったかもしれない。しかし、この黙示録に記されている出来事はこれまで地球上に起こったこととは比較にならないものです。なぜなら、神の怒りがついにこの地上に下るときが来るからです。人間の罪を憎み、罪に対して怒りを覚えておられる全く聖い神が、長い間約束しておられたそのさばきをついにこの地上に下すときが来たのです。

今日、私たちは第五番目の封印を見ていきます。

★第五の封印

A. ヨハネが見たもの 9節

9節「小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしとのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。」、最初にこのみことばから私たちが教えられることは、ヨハネが見たことです。次に、ヨハネが聞いたことが記されています。

ヨハネがいったい何を見たのか？9節に出て来ますが、ここに書かれている三つのことに注目してください。

1. 祭壇の下にいる

祭壇とはどのような祭壇を指しているのか？というのは、聖書にはいけにえをささげる祭壇と香を炊く祭壇、香壇と言いますが、があります。

1) 全焼のいけにえの祭壇

マタイ5：23-24「だから、祭壇の上に供え物をささげようとしているとき、もし兄弟に恨まれていることをそこで思い出したなら、：24 供え物はそこに、祭壇の前に置いたままにして、出て行って、まずあなたの兄弟と仲直りをしなさい。それから、来て、その供え物をささげなさい。」

マタイ23：18-20、35「：18 また、言う。『だれでも、祭壇をさして誓ったのなら、何でもなし。しかし、祭壇の上の供え物をさして誓ったら、その誓いを果たさなければならぬ。』：19 目の見えぬ者たち。供え物と、その供え物を聖いものにする祭壇と、どちらがたいせつなのか。：20 だから、祭壇をさして誓う者は、祭壇をも、その上のすべての物をもさして誓っているのです。」「：35 それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復がおまえたちの上に来るためです。」

ルカ11：51「それは、アベルの血から、祭壇と神の家との間で殺されたザカリヤの血に至るまでの、世の初めから流されたすべての預言者の血の責任を、この時代が問われるためである。そうだ。わたしは言う。この時代はその責任を問われる。』」

Ⅰコリント9：13「あなたがたは、宮に奉仕している者が宮の物を食べ、祭壇に仕える者が祭壇の物にあずかることを知らないのですか。」

Ⅰコリント10：18「肉によるイスラエルのことを考えてみなさい。供え物を食べる者は、祭壇にあずかるではありませんか。」

へブル7：13「私たちが今まで論じて来たその方は、祭壇に仕える者を出したことのない別の部族に属しておられるのです。」

黙示録11：1「それから、私に杖のような測りざおが与えられた。すると、こう言う者があった。「立って、神の聖所と祭壇と、また、そこで礼拝している人を測れ。」

2) 香壇

祭司であるザカリヤがくじに当たって香を炊くために神殿に入ったときに、香壇のすぐ右に御使いが立ったということが記されています。その後、ザカリヤは神から子どもを授かる、その名をヨハネと付けるようにということが続いていきます。

ルカ 1 : 11 「ところが、主の使いが彼に現れて、香壇の右に立った。」

黙示録 6 : 9 「小羊が第五の封印を解いたとき、私は、神のことばと、自分たちが立てたあかしのために殺された人々のたましいが祭壇の下にいるのを見た。」

黙示録 8 : 3, 5 「3 また、もうひとりの御使いが出て来て、金の香炉を持って祭壇のところに立った。彼にたくさん香が与えられた。すべての聖徒の祈りとともに、御座の前にある金の祭壇の上にささげるためであった。…5 それから、御使いは、その香炉を取り、祭壇の火でそれを満たしてから、地に投げつけた。すると、雷鳴と声といわずまと地震が起こった。」

黙示録 9 : 13 「第六の御使いがラツパを吹き鳴らした。すると、私は神の御前にある金の祭壇の四隅から出る声を聞いた。」

黙示録 14 : 18 「すると、火を支配する権威を持ったもうひとりの御使いが、祭壇から出て来て、鋭いかまを持つ御使いに大声で叫んで言った。「その鋭いかまを入れ、地のぶどうのふさを刈り集めよ。ぶどうはすでに熟しているのだから。」

黙示録 16 : 7 「また私は、祭壇がこう言うのを聞いた。「しかり。主よ。万物の支配者である神よ。あなたのさばきは真実な、正しいさばきです。」

出エジプト 40 : 5 「あなたは香のための金の壇をあかしの箱の前に置き、垂れ幕を幕屋の入口に掛ける。」

ここでヨハネが見た祭壇はいけにえをささげる祭壇ではなくて、香壇である言えます。なぜなら、もし、いけにえの祭壇とするなら、いけにえは祭壇の上に置きます。「このたましいは祭壇の下にある」と書かれています。もう一つは、この後、10節を見ていきますが、10節にはそのたましいが神の前に祈っているその祈りが書かれているからです。ちょうど、人々が香を炊いてその香りが神のもとに上って行ったように、この祈りはそのように神に届くのです。だから、ヨハネが見た祭壇は香壇であるということが分かります。

2. 殺された人々

1) 殺された人々とは？

だれのことでしょう？これは殉教した人たちのことです。では、いつの時代の殉教者のことかと私たちは考えます。なぜなら、歴史上多くの人たちが信仰ゆえに殉教していったからです。いったい、どの時代の殉教者を指しているのか？結論を言うなら、この殉教者は患難時代にいのちを落としたクリスチャンたちのことです。前回も見たように、患難時代は今のこの恵みの時代が終わった後、つまり、クリスチャンたちが地球上からいなくなった後、7年間の患難時代が起こります。その7年間に信仰に至ったクリスチャンたちのことです。どうしてそのように言えるのか？

私たちは封印を解くということを読んで来ています。小羊であるイエス・キリストがその封印を解いています。そして、患難時代に起こる様々な出来事を見ているのです。そのことからこの五つ目の封印が解かれたときに見たたましいとは、この患難時代に救われ、そして、いのちを落とした人たちのたましいであると、そのように理解するのがこの文脈からの正しい解釈であると思います。

2) 殺された理由

みことばを見ると、彼らが殺された理由まで書かれています。二つの理由が挙げられています。

(1) 神のみことば

これは「聖書」のことです。この人たちは神のことばである聖書を宣べ伝えたのです。恐らく、空中再臨が起こって地上からクリスチャンがいなくなってしまった、その出来事を見て、多くの人たちがこの救いに至るのでしょうか。また、多くの証人が出て来ます。彼らを通して、もう一度福音のメッセージを聞くのでしょうか。そして、彼らがそのことを信じて、今度はその神の真理を宣べ伝えるのです。聖書が言っていたことは本当である、聖書が約束していたことがすでに起こり、今現実に約束通りに患難の時代が起こっている、今起こっていることも神の預言の通りであると。彼らは神のおことばを語り続けるのです。その結果、彼らはいのちを落としていくのです。神のみことばから真理を学び、真理を受け入れ、その真理を語っていた彼らがそれゆえにいのちを落としていくのです。

(2) 自分たちが立てたあかし

この「立てた」ということばは「失わないように保存をする、守る」という意味です。ですから、彼らは真理を受け入れ、信じた真理を堅く守っていたのです。この「立てた」ということばの時制は未完形です。その行為がまだ完了していないということです。つまり、この殉教者たちは自分たちが信じ

た真理を守り続け行い続け、語り続けていたのです。現在形と同じように、今もなお彼らはそれを継続して守っているということです。

彼らは迫害を受けて殉教することが分かっているが、また、実際に殉教していくのですが、それでも忠実に神の真理の証を、神のみことばを語り続けていたのです。それがこの箇所が教えていることです。なぜ、彼らはいのちがけで主イエス・キリストの福音を、みことばを語り続けたのか？イエスは言われました。ヨハネの福音書 14 : 21 に「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現します。」とあります。これがクリスチャンです。数ある宗教の中からキリスト教を選んだわけではありません。クリスチャンは神を愛する者たちです。主イエス・キリストの十字架の贖いを見て、それをただ信じるだけではない、その神に心から感謝し心から愛する者たちです。そのような人へと神は私たちクリスチャンを生まれ変わらせてくださったのです。神を愛するゆえに、その神を捨てることはできません。いのちがけで神のすばらしさを真理を語り続けていた、それがこの患難時代のクリスチャンたちです。

そのことを知ると、どの時代でも同じです。クリスチャンは神を愛する者へと生まれ変わったのです。神を愛する者たちは神の戒めを守り神に従っていこうとします。まさに、そのように彼らも歩んでいたのです。ですから、彼らの生き方、彼らの殉教というのは、彼らの神に対する忠誠心を証明しています。彼らはまさに死に至るまで忠実だったのです。

そして、このように忠実に生きる彼らを神の敵は容赦しませんでした。彼らを殺していったのです。

3) 迫害の約束

そのことがこの箇所に記されています。詳しい説明をする必要はありません。なぜなら、皆さんは次のことをよくご存じだからです。もし、あなたが主の前に忠実に生きていこう、神に敬虔に生きていこうとするなら、必ず、あなたは迫害を受けるということです。もしかすると、もうすでにそのことを経験している人がたくさんいるかもしれません。パウロはⅡテモテ 3 : 12 で「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と言いました。神に対して、神を敬いながら神に忠実に生きていこうとするなら、必ず、あなたは迫害を受けると。この箇所は私たちに大切なことを教えています。「キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者」と書かれています。つまり、この人たちは神の前を正しく歩いていきましょうとか、神に喜ばれるように生きていきましょうとか、そのような願いをかつてもったのではなく、彼らはその願いを持ち続けているのです。なぜなら、「敬虔に生きよう」ということば、「願う」ということばは二つとも現在形を使っているからです。彼らは心から神に喜ばれる生活を送りたいと願い続けていたのです。そのように生きていたのです。それがクリスチャンです。

確かに、失敗もたくさんあります。神が悲しまれることを行なうことも、私たちの日々の生活においていっぱいあります。でも、私たちの心の中には主を喜ばせたいという願いをもち、その願いは変わることなく、その願いが私たちを押し出していくのです。それが神によって生まれ変わった人々たちです。もし、あなたがそういう人であったなら、必ず、あなたも様々な迫害を経験すると。主イエス・キリストもこのように言われました。ヨハネ 15 : 20 「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」

先週のことですが、アメリカのニュースで、町の名前は忘れましたが、同性愛者が結婚のライセンスを求めに来たときに、その公務員はそれを発行しませんでした。なぜ彼女が発行しなかったのか？「それは聖書の教えに反しているから」と彼女はクリスチャンです。その結果、彼女は逮捕されて収監されました。今、アメリカではこれからの大統領選挙に向けていろいろな候補者が立っています。一人のクリスチャンである候補者は「これは大変な問題だ。この国はこうした宗教的な弾圧から逃れて自由を求めて集まった。今は、聖書の教えを信じる者をこのように弾圧する。聖書の教えに従って生きようとすると収監されるとは。」と言っています。間違いなく、このようなことは世界中に起こって来ます。なぜなら、聖書がそのように教えているからです。キリストにあって忠実に生きようと願うほどに、この世はそれを歓迎しません。そのような時代になって行くとパウロが言っていたし、その当時に比べて私たちは益々そのことを実際に経験します。

◎実は、これにも神の完全なご計画がある

・報いが約束されている

でも、このような迫害を見てもその背後には神がおられるのです。イエスが言われたように、もし、あなたが主イエス・キリストに忠実に従うことによっていろんな迫害を経験したとするなら、主イエスが言われています。マタイ 5 : 10 - 12 「10 義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。:11 わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせ

るとき、あなたがたは幸いです。:12 喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。」、つまり、あなたが神を愛して神に喜んで従っていこうとする、その結果、いろいろな迫害を経験するかもしれない。でも、あなたがその中でしっかり主を見て生きていくなら、主ご自身があなたにすばらしい報いを与えてくれるということです。

感謝なことに、神は私たちのすべてを分かってくださっています。あなたの神に対するその愛を、あなたが喜んで神に仕えようとしているその思いをちゃんと分かってくださって、それにふさわしい報いを天にあって与えてくださると。ですから、あなたに起こる迫害は偶然に起こっているではありません。すべて神の御手のうちにあるのです。

・その人の救いの真実性を明らかにする

また、このようにも言えます。迫害を通して、その人の信仰が本当かどうか明らかになります。イエスはマタイの福音書13章で種蒔きの話をされました。ある人はみことばを聞いて喜んでそれを受け入れるが、それは長く続きません。13:21(同、マルコ4:17)「しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」、ですから、この人たちは神のことばを聞いて最初は喜んでいますが、その信仰を保っていくために、主に従っていくことにおいていろいろな迫害や困難が出て来ると、信仰から離れると。その理由を教えてください。「自分のうちに根がないため、」と、つまり、救われていないということです。その人たちは迫害や困難がなければ喜んで従うかもしれないが、もし、迫害や困難が起こると信仰から離れてしまうと。

ですから、確かに、迫害を見ても、主はそれを良しとされて、皆さんがそれを経験するときに、あなたが主に忠実に生きるなら神はすばらしい報いを与えてくださるし、また、その迫害を通してあなた自身の信仰が本物かどうかを明らかにしてくださるのです。

さて、今、患難時代の迫害を見ているのですが、

* この患難時代の迫害は、7年間の時代の後半になるほどに激化する

前回、私たちは四つの馬とその乗り手を見ました。これは患難時代の始まりから前半の様子を見たのです。ですから、マタイ24:8ではこの前半のことを「産みの苦しみ」と言っています。「しかし、そのようなことはみな、産みの苦しみの初めなのです。」と。まだ、苦しみはこの後続いていくのです。陣痛の後に出産という痛みがあるのです。この後にもっと苦しいことが来ると、黙示録12:17にはこのように書かれています。「すると、竜は女に対して激しく怒り、女の子孫の残りの者、すなわち、神の戒めを守り、イエスのあかしを保っている者たちと戦おうとして出て行った。」と。ですから、みことばが私たちに教えていることは、この患難時代は時代が進むほどに、終わりが近づくほどに、大変な困難、大変な痛み、大変な迫害が起こって来ます。

今見ているこの第五の封印が開かれることによって、いよいよ患難の時代は後半へと入って行きます。大患難時代と呼ばれますが、それにふさわしい大変な時代へと入って行きます。

3. たましい

ヨハネが見たもの、もう一つは「殺された人のたましいが」とあります。「たましい」とは、ギリシャ語の辞書では「からだは死んでも失せない靈魂」とあります。また、神学書を見ると「肉体が死を迎えても、その後も存在を続ける霊的実在である」と。つまり、人間は死んで終わるのではない、たましいはその後も生き続けるということです。ヨハネがここで見たことは、殉教した人たちのたましいが今なお存在している、生きていくという事実でした。ですから、聖書を見ると、人は死んだら肉体だけでなくたましいも消えてなくなってしまうとは教えていません。その人のたましいは生き続けるのです。

患難時代に殉教した人たちのたましいはまだからだのよみがえりを経験していません。ですから、9節を見るとそこには「殺された人のたましい」としか書かれていません。「からだとたましい」とは書かれていません。ある人たちは11節に「ひとりひとりに白い衣が与えられた。」とあるから、衣を身に着けるにはからだが必要だから、患難時代の人たちは死を経験して、よみがえって栄光のからだをいただくその間に、また、別の、特別なからだをいただくのではないかと言います。その根拠が「白い衣」を受けるとのことだと…。しかし、そのことは聖書の教えではありません。ここに記されているのは、あくまで、殺された人たちのたましいです。ですから、私たちはこの9節に書かれていることは、患難時代に殉教したクリスチャンのからだを持っていないたましいのことで、それが祭壇の下にいるのをヨハネが見たと取るのです。

彼らのからは患難時代が終わってからよみがえります。患難時代に入らない私たち信仰者は、イエス・キリストの再臨のときにからだがよみがえって栄光のからだをいただきます。イエスが私たちを迎えに来てくださったそのときに、私たちは栄光のからだをいただきます。でも、患難時代の人たちは、この7年間の患難時代には多くの人たちがいのちを落としますが、彼らの肉体がよみがえるのは患難時

代の終わりです。ですから、黙示録 20 : 4 に「また私は、多くの座を見た。彼らはその上にすわった。そしてさばきを行う権威が彼らに与えられた。また私は、イエスのあかしと神のことばとのゆえに首をはねられた人たちのたましいと、獣やその像を拝まず、その額や手に獣の刻印を押されなかった人たちを見た。彼らは生き返って、キリストとともに、千年の間王となった。」と、このように書かれています。患難時代に殉教したクリスチャンたちがよみがえるのは、この箇所が教えるように、患難時代が終わった後にその約束に与るのです。

さて、皆さんにもう少しこの「たましい」について見ていただきたいのですが、この「たましい」は全く意識がなかったのかどうか？意識はありました。また、理性もありました。なぜなら、10節を見ると「彼らは大声で叫んで」とあるからです。この「彼ら」は9節の「殺された人々のたましい」のことです。その「たましい」がこのように大声で神に向かって叫んでいるのです。そして、「」の中は彼らの祈りです。つまり、彼らはものを考えることもでき、意識があったのです。

そのことを聞いて皆さんには驚くことではないでしょう。あのラザロと金持ちの話を思い出してください。ルカの福音書 16章に書かれています。金持ちもラザロも肉体的な死を迎えました。そして、金持ちはハデスに行きます。このハデスはイエスを信じていない人が最後の審判を待つための待合室のようなところ。最後の最後に、彼らは「大きな白い御座のさばき」に出て来るのですが、出て来るところがこのハデスです。大変な苦しみの場所です。そのように金持ち自身が言っています。ルカ 16 : 23-24 「その金持ちは、ハデスで苦しみながら目を上げると、」と、彼はたましいをもっていて、そのたましいは苦しんでいるのです。「アブラハムが、はるかかなたに見えた。しかも、そのふところにラザロが見えた。:24 彼は叫んで言った。『父アブラハムさま。私をあわれんでください。ラザロが指先を水に浸して私の舌を冷やすように、ラザロをよこしてください。私はこの炎の中で、苦しくてたまりません。』」と言います。

27-28節には「:27 彼は言った。『父よ。ではお願いします。ラザロを私の父の家に送ってください。:28 私には兄弟が五人ありますが、彼らまでこんな苦しみの場所に来ることのないように、よく言い聞かせてください。』」とあります。少なくとも分かることは、この金持ちが死んで肉体は墓に入り、たましいはハデスに行きました。そして、その火の燃えているハデスにあってたましいは苦しくてたまらないと。

ですから、人が死んだ後、そのたましいは何も感じなくなるとか、なくなってしまうとか、残念ながら、聖書はそのようには教えていません。ちゃんと意識をもって存在するのです。

B. ヨハネが聞いたこと 10, 11節

今度はヨハネが聞いたことが10, 11節に書かれています。

1. 彼らの祈り 10節

10節「彼らは大声で叫んで言った。「聖なる、真実な主よ。いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」、ヨハネは彼らのたましいの主に対する祈りを聞きます。「大声で叫んで」と記されています。この「叫ぶ」ということばは「助けが必要、緊急の助けが必要」であることを表わすことばです。彼らは本当にその答えを聞きたかったのです。そのことがこの10節の初めのことばによって見る事ができます。

そこで彼らの祈りを見るのですが、それは主のみこころに沿った祈りだということです。「いつまでさばきを行わず、地に住む者に私たちの血の復讐をなさらないのですか。」とありますが、この「血」とは「殉教」のことです。彼らは殺されたからです。そのことを言うのです。信仰者である自分たちが死を経験した、この殉教に関して復讐をなさらないのですか？と問うのです。また、「地に住む者」とは、救われていない人たち、神に逆らい続けている人たちのことです。「地に住む」ということばは、黙示録3章、8章、11章、13章、17章にも出て来ます。また同時に、そこにはクリスチャンたちを迫害し、また、迫害し続けている人たちも含まれるでしょう。

この祈りを見ると、地上で生きている彼らにいつまでさばきを下さないのですか？と言っています。ということは、殉教者たちからいのちを奪った者たちがまだ地上で生活していたことを見て取れます。自分たちは殉教し、そのたましいは祭壇の下にあった…と。神の祝福の中にあるのですが、彼らに死をもたらした者たちはまだ地上に生きていたのです。「復讐をなさらないのですか。」ということばを見ると、まだ彼らは地上で生きているから早く彼らに私たちの復讐をしてくださいと、そのように祈っているかのように取れます。もし、彼らそのように祈っていたとするなら、それはみことばに反することです。みことばが教えることは、マタイ 5 : 44 「しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」、イエスはこのように言われました。ローマ 12 : 14 でも「あなたがたを迫害する者を祝福しなさい。祝福すべきであって、のろってはいけません。」と教えています。ですから、もし、ここで彼らの祈りが「神さま、私たちを殺した者たちに復讐をしてください！」という祈りであったなら、確かに、このみことばが教えていることに反します。

でも、実はそうではなかったのです。なぜなら、彼らが主にささげた祈り、主はその祈りを聞かれて彼らを責めておられないからです。もし、個人的な憎しみから祈っていたなら、主はそのことを責めら

れたでしょう。でも、どこにも彼らが責められている箇所はありません。彼らは個人的な復讐を願ったのではなく別のことを神に求めています。そして、それは神の前に正しかったのです。彼らが求めたことは「主なる神が定めたそのさばきをいつ下されるのですか？」ということです。あなたが約束されたさばきはいつ地上に下るのですか？と、そのことを主に尋ねているのです。なぜなら、みことばには神は必ずさばきを下すと約束されているからです。

☆主のさばきの約束

イザヤ34：1-2, 8：「1 国々よ。近づいて聞け。諸国の民よ。耳を傾けよ。地と、それに満ちるもの、世界と、そこから生え出たすべてのものよ。聞け。2 【主】がすべての国に向かって怒り、すべての軍勢に向かって憤り、彼らを聖絶し、彼らが虐殺されるままにされたからだ。」「8 それは【主】の復讐の日であり、シオンの訴えのために仇を返す年である。」

申命記32：35：「復讐と報いとは、わたしのもの、それは、彼らの足がよろめくときのため。彼らのわざわいの日は近く、来るべきことが、すみやかに来るからだ。」

Ⅱテサロニケ1：6-9：「6 つまり、あなたがたを苦しめる者には、報いとして苦しみを与え、7 苦しめられているあなたがたには、私たちとともに、報いとして安息を与えてくださることは、神にとって正しいことなのです。そのことは、主イエスが、炎の中に、力ある御使いたちを従えて天から現れるときに起こります。8 そのとき主は、神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々に報復されます。9 そのような人々は、主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受けるのです。」

必ず、さばきが来る、神に逆らう者たちに必ずさばきを下すと約束されています。ですから、彼らは主に尋ねているのです。自分自身が自分に為された悪に対して報復するとか、復讐すると言っているではありません。それはもう神のわざである、神が為さることであると彼らは知っているのです。彼らはこの患難時代の世界を見て、この世がなお主に逆らい続け、主を愛し従う者たちを苦しめ殺害するという悪を行ない続けている現実に対して、「あなたが約束されたさばきはいつこの地上に下るのですか？」と尋ねたのです。ですから、彼らはみこころに沿った祈りをしたのです。

2) 主を信頼した祈り

彼らは神にこのように呼びかけています。10節「聖なる、真実な主よ。」と。

・聖なるお方 = 「神さま、あなたは聖なるお方です」と言います。聖なるお方ゆえに、どんな罪も放っておかれませんか。神は100%聖い正しいお方ですから、どのような小さな罪も放っておかれることはない、必ず、その罪をさばくお方だと、彼らはそのことを知っています。そこで、神のことを「あなたは聖なるお方だ」と言うのです。詩篇5：4-6に「4 あなたは悪を喜ぶ神ではなく、わざわいは、あなたとともに住まないからです。5 誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行うすべての者を憎まれます。6 あなたは偽りを言う者どもを滅ぼされます。【主】は血を流す者と欺く者とを忌みきらわれます。」、ハバクク1：13にも「あなたの目はあまりきよくて、悪を見ず、労苦に目を留めることができないのでしょうか。なぜ、裏切り者をながめておられるのですか。悪者が自分より正しい者のみこむとき、なぜ黙っておられるのですか。」と書かれています。使徒の働き17：31には「なぜなら、神は、お立てになったひとりの人により義をもってこの世界をさばくため、日を決めておられるからです。そして、その方を死者の中からよみがえらせることによって、このことの確証をすべての人にお与えになったのです。」とあります。

ですから、聖なる神であるゆえに、悪を憎んでいる神であるゆえに、いつ、そのさばきを下すのですか？と問うのです。

・真実なお方 = また、「真実な主よ。」と言っています。「神、あなたは約束を守られるお方です」という意味です。彼らは神は約束されたことを必ず守られると知っているのです。さばきを約束された以上、必ず、さばきが来ると、それが彼らの信仰です。民数記23：19「神は人間ではなく、偽りを言うことがない。人の子ではなく、悔いることがない。神は言われたことを、なさないだろうか。約束されたことを成し遂げられないだろうか。」、Iサムエル15：29「実に、イスラエルの栄光である方は、偽ることもなく、悔いることもない。この方は人間ではないので、悔いることがない。」、ルカ21：33「この天地は滅びます。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」、

ここで、彼らは個人的な恨みを晴らそうとしていたのではありません。神に自分たちのしたいことを訴えているのでもありません。神が為さると約束されたことの成就がいつなのか？ということを探っているのです。彼らの願いは、主の敵であるサタンを憎むゆえに、悪霊たち、偽キリストが滅びることです。神の正義が為されることを待望していたのです。「神さま、いつなのですか？」と、それが彼らの祈りだったです。

2. 主の応答 11節

すると、それに対する主の応答が書かれています。11節「すると、彼らのひとりひとりに白い衣が与えられた。そして彼らは、「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、あなたがたと同じように殺されるはずの人々

の数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んでいなさい」と言い渡された。」と。

1) このたましいの一人ひとりに白い衣が与えられた

皆さんも多分、「白い衣」と聞いて初めに描くのは「神の義」のことでしょう。確かにそうです。主イエス・キリストを信じた者たちは、罪の衣を脱ぎ捨てて、義の衣を身に着けるようになった、神が義の衣を着せてくださったのです。しかし、この人たちはこのときに義とされたわけではありません。もうすでに、彼らは救われているからです。義とされているのです。すでに義とされている者たちが改めて白い衣を身に着ける必要性があるのでしょうか？実は、この「白」とは勝利を表わすのです。

この文脈から見ると、多くの患難時代のクリスチャンたちはその信仰ゆえに殺されました。神の敵はこうしてクリスチャンたちを殺すことで、自分たちは神に勝利したかのように思うでしょう。でも、彼らに白い衣、勝利の衣が着せられた、本当の勝利者はサタンとサタンに従う者たちではなく、神であり、そして、神を信じる者たちです。私たちクリスチャンです。Ⅰコリント15：57「しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。」、Ⅱコリント2：14「しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちを導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかおりを放ってくださいます。」、

もう、私たちは死に対して恐怖をもたないのです。勝利を得たのです。イエス・キリストがああ死からよみがえって来られたことによって、私たちも「死んでも生きる」という確信をもって生きるのです。サタンは人間を誘惑し、人間は自らの選択によって罪を犯しました。それゆえ、彼らは「死ぬ者」となりました。人間はどのように努力をしてもこの死から逃れることはできませんでした。肉体的な死も、霊的な死も、私たちはどう頑張っても、罪が赦されて天国に行くという救いを自分の力で手に入れることはできないのです。だから、肉体的な死に対しても私たちは全く無力です。

しかし、イエス・キリストがよみがえって来られたことによってすべてが変えられたのです。主イエス・キリストがその死に対して罪に対して勝利者であるということをはっきりとされたことによって、イエスを信じる私たちも勝利者として今を生きることができるようになりました。私たちクリスチャンは「死んでも生きる」という確信をもって生きています。なぜなら、私たちの神がすべての神の敵に勝利された方だからです。ヨハネはⅠヨハネ5：4で「なぜなら、神によって生まれた者はみな、世に勝つからです。私たちの信仰、これこそ、世に打ち勝った勝利です。」と語っています。私たちクリスチャンは高らかに「感謝なことに、我々は勝利者だ。あのサタンに打ち勝たれた主が我々の神である。死に打ち勝たれた神が我々の神である！」と叫びます。だから、私たちはこの勝利者によって救いに与り、勝利者の側についた者として「我々も勝利者だ！」と確信をもって今日を生きることができるようになりました。

2) もう少し待ちなさい

そこでこのように言われます。

(1) **もうしばらくの間、休んでいなさい** : この意味に関して、レオン・モーリスという神学者は「祝福のうちに休みなさい」と言います。マッカーサー先生も「怒りが訪れる神のときまで、天国の休息の祝福を継続して楽しむようにと招いておられる。」と。つまり、主がこのたましいに言ったことは「心配しなくてもいい。あなたがたは今神から預かった祝福を楽しむように。必ず、わたしが約束したことを為すから。今、あなたがたはそのことを心配しないで、却って、与えられた祝福を楽しみなさい。」ということなのです。

なぜなら、「もうしばらくの間、」とあるからです。この「しばらく」とは「時間が短い」ということです。つまり、神はここでさばきが来ないと言われたのではなく、もうすぐ来るから、その時は非常に短いから心配しなくてもいい、あなたがたは祝福を楽しみなさいと言われたのです。

(2) **いつまで休むのか** : 「あなたがたと同じしもべ、また兄弟たちで、」とあります。だれのことか？殉教者と同じクリスチャンのことです。もうすでに亡くなったあなたがたと同じしもべ、クリスチャンたちのことです。クリスチャンは神の奴隷だからです。「また兄弟たち」と、主にある者はみな神の家族に属する兄弟です。だから、ここで言っていることは、クリスチャンたち、彼らが「あなたがたと同じように殺されるはずの人々の数」が満ちるまで、と、この「満ちる」とは「いっぱいにする、満たす」ということで、ここで主が言われたことは、殉教者の数が増えるまで待っていなさいということなのです。つまり、定められた殉教者の最後の一人がその殉教者のリストに加えられたときに、このさばきが下るとのことです。しかも、この「満ちるまで」という動詞は受動態です。人間が為すのではなく主が為されることだと言うのです。このこともすべて神の御手のうちにあるのです。神がすべてのことを定めておられて、そして、神が定めた殉教者が最後の死を迎えたとき、そのときが神の約束されていた審判のときがこの地上に下るときだ、もうしばらくのことと言われたのです。

これがこの中で神が約束されたことです。さばきは確実に来ると。神が言われたようにさばきは来ます。その兆候を私たちは今この地上に住んで見えています。皆さん、患難時代に信仰を持つ人は確かに起こって来ます。でも、見て来たように、その人たちは大変な苦しみを経験します。ほとんどの人たちは殉教していきます。7章には、多くの殉教者たちのことが記されています。13章を見ると、獣を拝まない者たちの死が記されています。なぜ、そのときまで待つのですか？今、神はあなたに救いを与えてくださるのです。なぜ、患難時代を待つのですか？そして、患難時代にあなたが入って行って、そのときにあなたが救われる保証はどこにもありません。しかし、感謝なことに、神はあなたに今日救いの機会を与えてくださっています。もし、まだこの救いを信じておられないなら、神は今日、あなたにこの救いをくださいます。それをいただくことです。

あわれみ深い神は患難時代にも救われる人を起こしてくださる、しかし、見て来たように、そこには大変な犠牲が伴います。そこにも神の恵みを見ます。でも、今、あなたがこの主イエス・キリストを信じこの方に従っていこうとするなら、神はあなたを救ってくださり、すばらしい恵みの中に今入れてくださる。皆さん、今日が救いの日です。この日にこのすばらしい神の救いをいただくことです。

救われた皆さんも、今日、神のみことばを聞いて、今、私たちはどのようなところに生きているのか？この後何が起こって行くのか？見て来ました。あなたの救いは保証されているでしょう。では、あなたの家族はどうですか？あなたの友人はどうですか？今、この時です。私たちがこのすばらしい救いを伝えるのは…。私たちが天に行った後、私たちは語るできません。今、この地上にいる間に…です。

どうぞ、この一週間、神が遣わしてくださる様々なところで、そして、あなたの心から愛する者たちに、このようなことを神は計画しておられる、同時に、神は救いを備えてくださっていると、そのメッセージを伝えてください。そして、私たちが心から神の前に願うことは、この救いに与る者たちが、私たちの家族の中に、愛する者たちの中にこの一週間起こされることです。そのことを信じて期待して、主の福音を語り続けてください。

《考えましょう》

1. 患難時代の殉教者たちが殺された二つの理由を挙げてください。
2. 人が死を迎えた後、たましいも同じように死ぬのでしょうか？どうなったのかをお書きください。
3. 殉教者たちは、個人的な復讐を祈り求めたのでしょうか？何を求めていたのでしょうか？
4. 主は、ご自分のさばきが訪れる条件を語られましたが、それは何だったのでしょうか？